津田昇平教話　第十五話

令和三年一月十五日　朝の教話

毎日の家業を信心の行と心得て勤め、おかげを受けるがよい

おはようございます。令和三年一月十五日をお迎えさせて頂きました。

昨日は、信心させて頂きましたら、大厄（たいやく）は小厄（しょうやく）にして頂ける。大厄というのは、たらいのおけに水をいっぱい溜（た）めて、屋根からどーっと流したら大厄で、それをぞろぞろと、ちょろちょろと、小分け小分けにして流して頂く、それが小厄やと。

大厄小厄というと、大きな、巨大な津波のようなものが大厄というふうにも言えるでしょうし、何とか凌（しの）げるような、波が続くような形で収めて頂くというのが小厄になりますね。大厄であれば自分の身が持たないし、小厄であれば自分の身が保たせて頂ける範囲で、あくまで信心しておりましたらね、信心しておりましたら、そうして自分の身をお守り

頂きながら、そこを凌がして頂き、その後には繁盛のおかげを頂くという、そういう教祖様のご理解をお話させて頂きました。

では、信心したらそういうおかげを頂けるということですが、じゃあどんな信心したらいいんかと。信心と言いましても、「しんはわが心、じんは神である」ですから、心が神様に向いたらそれで信心になると言えばそうなんですけど、でも、その中でも、どういう信心をさして頂いたらいいのかというのは気になるところですね。

教祖様はまた、お参りの方にこういうご理解を残していらっしゃいますね。ある方がお参りをされた。そしてご自身の不安なところをですね、申し上げたんですよね。そうすると教祖様は、

「天地の神様は氏子の親神である。かわいいわが子を、どうして難儀に遭わせなさるであろうか。わが子をもって合点するがよい。常平生、神様に取りすがっていれば、神様と心安くならせてもらっているも同然である。無理も聞いていただける。大難は小難にまつりかえてくださり、小難は無難にお取り払いくださる」

と仰せられた。そこで、どの信心にも行があるが、どのような行をしたら神様のみ心にそわしていただけるかということをお伺い申しあげると、

【理Ⅱ　福嶋儀兵衛　八より抜粋】

ちょっとここでいったん区切りましたら、今、教祖様がお参りの方に仰ったことっていうのはね、昨日お話したみ教えとほとんど一緒やと思いますね。信心さして頂きましたら、大厄(たいやく)は小厄(しょうやく)って、昨日ご理解でありました。今日は、大難(だいなん)は小難(しょうなん)に。まあ同じことでしょうね。教祖様は、大難小難、大厄小厄という表現をしたのか、あるいは聞いた側がそういうふうにして理解されたのかは分かりませんけれども、まあ同じことでしょう。常平生(つねへいぜい)、神様にとりすがっていけば、神様と心安くならして頂ける。神様と心安うならして頂いたら、無理も聞いて頂ける。それぐらい心安くならせて頂く。そうすると、大難は小難にまつりかえて頂けると

いうことですね。

神様はなんて言ったって人間の親様ですから、かわいいばっかりで、そんな罰を与えるようなこと、苦しめるようなことをするはずがない。ただただかわいいばかりやから、しっかりお縋(すが)りしておかげを頂いてもらいたいということを仰っとるんですね。

この方がえらいなと思うのは、じゃあ一体全体、どんなご信心させてもらったらいいんやろかということを、お伺いしているわけですね。どの信心にも、金光様の信心だけじゃなく、その当時のどんな神仏を敬うのでも、行(ぎょう)というものがある。どんな行をしたら神様の御心(みこころ)に沿わせて頂けるんか、ということをお尋ねしたんですよね。そうすると金光様は、

このように仰った。

「世間には、水の行、火の行などがあり、いろいろの物断ちをする人もあるが、此方(このかた)にはそのような行はしなくてもよい。巡礼(じゅんれい)のように白い着物を着て所々方々巡(めぐ)り歩く暇(ひま)に、

【同】

巡礼(じゅんれい)というのは、四国八十八ヶ所とかですよね。そういう巡礼の時に

は、その当時には白い服を着ておられるということが多かった。で、四国をずっと歩いて巡るわけですけども、そうする暇に、時間があればということでしょう。そういう時間がなくとも、と言ってもいいかと思います。

毎日の家業を信心の行（ぎょう）と心得て勤め、おかげを受けるがよい。世のため人のため、わが身の上を思って、家業をありがたく勤めることができれば、それがおかげである。それが神様のみ心にかなうのである」

とみ教えくださった。

【同】

どういう信心の行（ぎょう）をしたらいいんですか、ということですよね。行なんです、修行ですよね。当時は火の行、水の行というのがあるわけですよね。もちろん食べないっていう、そういう行もありますよね。水の行というのも、そら夏やったら涼（すず）しいですけど、滝に打たれたりとか、あるいは冷たい川や海に身を浸して念仏を唱えたりということはあったでしょう。同じように、火の行、護摩（ごま）を焚（た）いたりしたり、暑いところで唱えたりとか、必死になりますんでね、熱い、冷たい、それをもう邪念（じゃねん）なんかを取っ払って、ただただひたすら唱えていく中で、自分の心やら神経や

らを研ぎ澄ましていく。で、ただただ神仏に向かっていくということやと思います。それはそれで悪いわけじゃないんでしょうけども、また物断(ものた)ちをする。物を断つって、これは食べない、あれは飲まない、あれはしないこれはしない、色々断っていくっていうことですね。

これを教祖様はよく、「表行(わぎょう)」と仰ったんですよね。表行っていうのは、「表の行(おもてぎょう)」って書いて、目に見える行ですね。それに対して、「表行よりも心行(しんぎょう)を」っていうことをよく仰った。心行っていうのは心の行ですから、目に見える表の行じゃないんです。目には見えない。傍(はた)からは分からないということなんです。でもそれは、行をしなさいということですよね。

ちょっと誤解がないようにと思いますけど、「表行よりも心行をせえ」と仰って、じゃあ表行がダメって、そんなことは仰ってるわけでもなくて、教祖様も表行はたくさんされました。「表行よりも心行」っていうような表現には、まあただただ表行っていうので、それさえしてたらそれでええやろうと、あとは好き勝手に、そん時だけ一生懸命、冷たいの寒いの熱いのに耐えてやったら、後はもう信心になってんねんやったら、その行が終わったら、後は好き勝手な心得違いしていようが何しようが関係なく生きてったらいいやろう、と。

拝み信心と同じですわね。お参りして、ご祈念してくれたらそんでいいやろう、と。あるいは、自分がご祈念したらそれでいいやろ。祈念祈祷（きねんきとう）

で助かるのやろ、というのと大して変わらんのです。表行っていうだけではね。それはやめときなさいっていうわけであって、教祖様にしても、あるいは直信（じきしん）の方にしても、本当の意味で神様に心を向けていくという心行ということを粗末にしていない限りにおいては、表行はせんよりもした方が研ぎ澄まされていくというのは、これは本当の話ですね。

ちなみに私もそういうふうにして神様に仰って頂いて、色々表行させて頂いた時期や、今はもういいって言って頂いたんですけれども、よくさせて頂いたなと。学院（金光教学院）の時からよくありましたし、それから十数年間はあったなと思います。あまり人に言うことはなかったですけれど、神様に言われて。でもそういうこともようあったと思います。

ついでです。行のことで言うたらね、高橋富枝(たかはしとみえ)先生という、金照明神(こんしょうみょうじん)という方なんかは、表行ということについても、「表行の一つもできない者は、本当の意味での心行もできない」とまで仰ったりとか、あるいは、これは佐藤範雄(さとうのりお)先生やったかな、「教祖様が『表行よりも心行』と仰ったとは言っても、本当に教祖様が言いたかったのは、心行の伴(ともな)わない表行をやめなさいと言ったんであって、表行そのものを否定したわけでもなんでもない」ということを仰ってましたね。どうしてもその単語、言葉、「表行よりも心行をせよ」というその言葉だけが、そん時独り歩きすると、教祖様の思(おぼ)し召(め)しとはちょっと違って、そこは強調されてデフォルメされてしまうことがありますね。そうすると、機微(きび)の部分、細かなと

ころ、本当のところというのが削ぎ落とされてしまうところがありますんで、ちょっと注意したいところではあります。

教祖様も色々修行されました。いわゆる表行と言われるものはあった。ただ教祖様の言う表行というのは、心を、信仰を伴(ともな)って、本当の意味で心の行を伴った上での行でした。ですんで、その当時によくあった、「祈念祈祷だけで、そんでええやないか。表行やっとったらそれでええやないか」「自分の性根(しょうね)、自分の心、そんなん関係あらへんわ。祈ってくれたらそれでええやん、祈っとったらそれでいいやん」「火の行水の行、やっとったらそれでいいやん。自分の性根？　そんなん関係ないわ」って、こういうのを「表行よりも心行をせえ」っていうことを仰ったというこ

とですね。そこは押さえておいた方がいいでしょう。

それはそうとしまして、どのような行(ぎょう)をしたら御心(みこころ)にかなうのか。世間では水の行、火の行、物断(ものた)ちの行、そういったものがあるけれども、この御道(おみち)、此方(このかた)は、教祖様は、そんなことはせんでもいいと。巡礼のように白い服を着て、いろんなところを歩いて行かれる、巡られる。それはすごい時間もかかりますし、また財もかかるでしょうし、手間暇(てまひま)かかりますね。当然ながら、たとえば子どもがいたとしたら、家族か誰(だれ)かにもう任せっきりでないと無理ですもんね。

そうすると、それを否定するわけじゃなくって、その時間がなかなか

取れなかったとしても、その時間の代わりに、日々の家の生業（なりわい）、家業、これを自分の信心の行、その中で信心の行をするんや、と。「水の行、火の行、物断ちの行ではなくって、家業、家の中での日々の暮らしの中でそん中での行をさせてもらいなさい」ということを仰るわけですね。

今はサラリーマンというのがありますでしょう。今で言ったらこれ、家業になるとは思うんですけど、でも本当の意味での家業っていうのは、農家であるとか、うちは魚売ってるとか、うちは大工なんやとか、ろうそく売ってるやら着物を売ってるやら、昔ですから、何かしら皆、手に職業持っとるわけですよね。それで自分はこれで生計、生業を立てているということが、当然皆さんそれぞれにあったわけです。今みたいに会

社があってそこに勤めるというのは、基本的にはない。皆それぞれが自分の家の業、家業というのがあったわけです。

今で言ったら、日々の生活の暮らしそのものですよね。サラリーマンであれ自営業であれ、何でもいいんですけどもね、主婦の方であれ、なんでもいいんです。つまり日々の生業です。日々の暮らしの中って言っていいと思います。毎日の家業、毎日の暮らしというものそのものを信心の行と心得て勤め、おかげを受けるがよい。こっからまた教祖様が言いたいところなんだろうと思います。

家業を「信心の行」って言っても、じゃあ家業を信心の行というのは、水とか火じゃないのは分かったと。水を使って火を使って、これを断っ

てっていう行じゃないのは分かったと。でも、家業を信心の行としてっていうところでは、まだどんな信心の行をしたらいいんですかってことは書いてないですわね。これはあくまで環境設定みたいなもんでね。水とか火とか、それは使わんと。家の暮らしの中で行をしなさいと。「じゃあ、どんな行なんですか？　どうやったら神様の御心にかなうんですか？」っていうお伺いに対して、まだ答えてらっしゃらない。あくまでまずは、どっかに行ったり、方々巡り歩いたり、白装束（しろしょうぞく）を着たり、水やったら水やり火やり、食べない、つけない、まあそういう行、いろんなことは、別にそれはせんでいい。家の中の暮らしの中でしなさい。じゃあ、どんなふうにしたらいいですか？　それがこっからですね。

「世のため人のため、わが身の上を思って、家業をありがたく勤めることができれば、それがおかげである。それが神様のみ心にかなうのである」

とみ教えくださった。

【同】

ここですよね、「世のため人のため、わが身の上を思って」。これ、人様のこと、自分の身の上のこと、家族のこともひっくるめてでしょうね。そのことを思って、おかげを頂いて立ち行きを願うように、それはいい

んです。大事な、一番肝心要(かんじんかなめ)はって言ったら、「日々の暮らしをありがたく勤めることができれば、それが修行なんだ」ということですよね。

冷たいのを耐えるとか、熱いのを耐えるとか、そういうのとはちょっと違って、白い装束を着て、大変な時間を、手間暇(てまひま)をかけて、そして巡礼するというのでもなくて、日々のあなたたち皆さんそれぞれの暮らしがあるやろう、と。その日々の今の暮らしの中で信心の行(ぎょう)をしなさい。どんな行ですか？　ありがたく勤めることができるかどうか。ありがたく勤めるというその心の行をしなさい。目に見える表の行じゃない、これは心の行なんやと。「これが行や」と仰るんです。「ありがたく勤めることができれば、それがおかげである」と。

考えてみたら、教祖様のみ教えっていうのは、「こうなったら嬉(うれ)しい、ありがたい」というのとはちょっと違って、「嬉しく楽しく有り難(あ)く過(が)ごさしてもらおう」とか、「さしてもらわんといかん」とか、「信心してるもんなら」とか、ありがたいのが勝手に湧(わ)いてくるのを待ってるいうのとはちょっと違うんですよ。嬉しく楽しく有り難くなるのを待ってたら、人間なんて、そんな人間の心なんてほんまええ加減なもんですからね、一生出てこないと私は思ってますよ。そんなもんやと思っています。それは心を耕していかんとあきません。有り難く嬉しく楽しく、同じことやと思います、教祖様の言いたかったのはね。そのありがたく勤めていくということ、ありがたくという中には、頭でありがたいというのとは

違って、心からということでしょうね。

心から、「真にありがたし」っていう言葉も、よく教祖様は仰います。「真に」というのは、心から、本当に、根っこから、深いところから、真の真からという、そういうことですね。真に、心から本当に、真にありがたいなぁ……と、心からそうなったら、嬉しい、楽しい、有り難い、和らぎ喜ぶ、そういう心ですわね。「おかげは和賀心にあり」の「和賀心」。この心を育てていくということ、それが行なんだということ。

「それ、どこでするんですか？　水の中でするんですか？」いや違う。「火の中でするんですか？」いやいや、違う違う。「何かを断ってするんですか？」いや違う。「白い装束で、巡り巡ってするんですか？」いや、

違う違う。「どこでするんですか?」あなたの日々の暮らしの中でしなさい。特別に目に見えることはしなくていい、傍(はた)からは見えんでもいい。そこで、心でしなさい。ありがたく勤めるように。ありがたく。口先だけやない。「真(しん)にありがたし」ということですね。それが行なんだ、ということを仰るわけです。それができるようになれば何よりのおかげやと。それが神様の御心(みこころ)にかなうのである、と。こうやって断言して仰いますね。

これ、四代金光様になってくると、四代様は、「木の切り株に腰をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれ」という教祖様のご理

解を大事にされて、その伝承者不明のみ教え一つから、御道(おみち)の信心、天地金乃神様(てんちかねのかみ)の思(おぼ)し召(め)し、教祖様のご信心を広げて、深めていかれましたけど、そこでも四代金光様は、これを行である、嬉(うれ)しく楽しく有(あ)り難(がた)く過ごしていく行のことを「お礼の稽古(けいこ)」と仰ったんですよね。

私は昔、「お礼の稽古って、稽古するもんか？　こんなん」って、やっぱり思ってましたよ、初めはね。だって、「ありがたいと思えないのに、『ありがとうございます』って、そんな難しい、無茶(むちゃ)なこと言いはるわ」ぐらいに思ってましたよ。「ありがたいと思って嬉しいと思ったら、自然と出てくんねんから、その方が自然やし、神様も喜んでくれはるわ」って思ってましたね。

これも間違いじゃないんです。実際それを、いよいよのところは願って下さってるんですけれども、心から「ありがたいなぁ……」っていうのを願って下さるのは間違いないけれども、こっからが大事ですよ。

そやけども、「じゃあ、いつになったら自分という人間が、『真(しん)にありがたし』ってなってくるんですか?」って自分に尋ねた時に、これがまた怪(あや)しいんですよ。思いません? 人間の心なんてほんまにね、ええ加減なもんで。気分ですよ。そしたら結局ね、それ言い始めたらね、気分に合わせてお礼言う。気分に合わせて「ありがとう」って思う。そしたらお礼申す。それ、ただの気分屋でしょう。これ信心というよりも、ただ自分の気分に合わしてるだけであって、御道の信心に合わしてるとか、神様

の御心（みこころ）に合わしてるわけじゃないです。ただの自分の気分なんです。自分の気分が、晴の日、雨の日があったら、じゃあ晴れてたら「ありがとうございます」、雨やったら全然言う気がないとか。でもちょっと違いますわね。行でも何でもないでしょう、それ。ほったらかしですよ。いやそうじゃない、と。「お礼の稽古」ということを仰って、教祖様は、「信心する者は、嬉しく楽しく有り難く過ごさして頂かなければならない」とか。

でね、思うわけです。「嬉しく楽しく有り難くってできたら、それが楽やわ。それができんから信心しとるんやないか」っていうふうにして思わんわけじゃない。でもね、そんなん百も千も承知の上で仰っとるわけですね。家業をありがたく、実際ありがたいおかげ頂いているわけで、

おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をして、おかげの中に死んでいくんですから。おかげの事実しかありませんのでね。難儀（なんぎ）っていうのはね、神様から与えられたんじゃなくって、自分が積んだか先祖が積んだか、どっちからしても身から出た錆（さび）です、要するところはね。

でも、神様はおかげを授けたいだけの話で、それを考えると、ありがたいしか本当はないんですよ。それを十分に感じとれていない自分の心、性根（しょうね）を、「お前どないなっとるんや」ということを突きつけられるわけですね。で、この方は、「どうやったら、どういう信心の行をしたら、神様の御心にかなうのか？」。

この前の言葉で言ったら、「神様は、氏子（うじこ）がかわいいばっかりや」と。

「どうして難儀にね、かわいい子を遭(あ)わせるようなことをするやろうか。わが子をもって合点したらええやないか。そんな痛めつけるようなことをしたいと思うか。そんなアホな、そんなことあらへん。常平生(つねへいぜい)、神様と仲良うしてな、心安うして、そしたら色々おかげ頂けるんや。大難(だいなん)は小難(しょうなん)、小難は無難にして頂けるんやから、だからしっかり信心しいや」「どんな信心したらいいんですか？　どんな行(ぎょう)したらいいんですか？」「いや、水の行とか火の行、方々巡り歩く、それは今はせんでいい。そんなことよりも、あなたが今生活してるやろ。家がある、家庭がある。日々の暮らしがある。その中で行をしなさい。目に見える表の行、表行(わぎょう)はええから、心の行をしなさい」「どんな行ですか？」「ありがたく勤めるんや」と。

で、この人ね、なんでそもそもお届けしたんかって言うたら、一番最初に戻(もど)りましたらですよ、心にかかる不安があったんです。でね、どんな不安かすらね、教典には書かないですよ。そらもうこの方は残したくなかったんかもしれませんわね。人には言いたくないんかもしれませんけど、それぐらいその人の中には悩みがあったんでしょう。

それを教祖様にはお届けして、不安を申し上げた。不安なんですから、ありがたいのとは全然違いますよね。でもその不安を申し上げたところ、その時に教祖様が仰ったのが、「信心のお稽古したらいいんだよ」と。「神様と仲良うさせてもらって、大難は小難に、小難は無難にさせてもらったらええやないか。あなたが不安でどうしたらええか分からんっていう

ことを尋ねるから言うけれど」「じゃ、どんな信心ですか？　どんな行ですか？」「そんな難しいことはない。えらいことはない。日々の暮らしの中でさせてもらったらいい。この御道は目に見える表の行やない、心の行やから、傍（はた）からは誰（だれ）にも分からん。分からんでいい。ただ神様に向かったらそれでいい」「じゃ、どんな行？」「家業をありがたく勤めるというところ、それが行なんや。修行なんや。修行しい。ありがたく勤めい」

この人、不安でいっぱいなんです。不安でいっぱいのところ、遠方からお参りに来てるわけでしょ。その不安なことでどうにもならなくって。なのにそんな人に対して、「ありがたく」というふうなことを仰る。これ、できるからするというんじゃないんです。できないからこそ、できるよ

うになる稽古をするんです。信心の稽古っていうのは、修行っていうのは。だって手習いですもん。習いに来てるんです。できるんやったら習いに来なくていいんです。でもそれがなかなか出来んから、お稽古するんです。

出来る故
なすにはあらず出来ぬ故
なすけいこなり日に日にあらたに

【四代金光様　お歌】

信心の稽古（けいこ）、信心の修行。どんな修行したらいいんか。不安でいっぱい、どうしていいか分からん。ある氏子（うじこ）に対して、また違う方に対して、わが子が死ぬや生きるやって、そんな時でどうしたらええかっていう、そんな中でも、「おかげ頂いてありがたいんや」いうことをまた仰ったりね。またその人なんかでも、なるほどな、ほんまやなと思って合点がいったっていうんやから、えらいもんですよ。

だから、心配や不安や、辛いや悲しいや、皆お互いある。でも、おかげを頂こうと思ったら、そこを修行せんといかん。目に見える修行せんでもいいけど、目に見えない心の修行をしないとあきません。神様に心を向けて、神様と仲良うならせて頂いて、神様はかわいい、かわいいって、

自分のこと言うて下さる、そのご慈愛(じあい)をしっかりと受け止めて、そして今の今も、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活して、おかげの中に死んでいく。このおかげの中で何もかもが行われて、今、自分はおかげで貫かれてあるんだという、それは全部、神様のご慈愛そのものなんだということ。それをしっかりと頂かせてもらって、そしてどんな不安や心配が今ある中ででも、それでも心配や不安のとりこになるんじゃなくって、ありがたいという本当のところに心を向けていきましょう、と。

「それが御道(おみち)の修行だ」ということを宣言されてるんですよね。

なるほど、そらそうやなぁと思います。それでこそ習い事で、修行で、御道の信心そのものなんやなと。でもこれ、教祖様が仰ったっていうよ

りも、神様の願いなんでしょうね、ほんとにね。

そこをお互いに心をかけて、何でもありがたくっていうのは難しいもんですよね。人間は気分屋のところがありますから。でも、自分のそのムラに合わせるんじゃなくって、お稽古をさしてもらう。晴の日は晴の日なりの信心があるし、雨の日は雨の日なりの信心があるわけでね。何も同じように一〇〇パーセント、心の中が日本晴れって、そらできたらええですけど、そうはいきません。そやけども、自分の心、自分の体調、自分だけじゃない、家族の様子によって、やっぱり心も気持ちも変わるじゃないですか。でも、そういう中ででも自分の心は、神様に心を向けながら、それでもありがたく、心配や不安や気になるところがあるから

ありがたくないんじゃなくって、そういう中ででも、真(しん)にありがたく生活させてもらえるようにしていく、それこそが、そこからの本当のおかげを頂くための一番の近道なんだ、ということを仰る。それが修行なんだと。

火の行、水の行じゃない。心の行なんだ。心行(しんぎょう)なんだ。そこが肝心要(かんじんかなめ)なんだ。「おかげは和賀心(わがこころ)にあり」、自分の心なんだ。心が和(やわ)らぎ喜ぶ心なんだ。そこからおかげが頂けるんだ。それが神様の心にかなうんだ。ということですね。

これは天地書附(てんちかきつけ)にも結局込められるわけですけれども、それをお互いにお稽古を、今日も一日、神様から新しい、まっさらな一日を頂いてま

すんで、それぞれ起こっている状況を考えたら、背景は色々あるかもしれません。本当に真っ白かもしれんし、いやいやたくさん、もうすでにいいお天気かもしれんし、曇り空かもしれんし、状況はね。

でも、そんな中ででも、背景はそうであれ、そんな中でも美しい絵を、最後に一日終わって神様に提出する時に、「ああ、結構やなぁ。この背景は少し暗い色やなぁ。でもその中でも、美しい、きれいな絵を描いたなぁ。結構やったなぁ」って、褒(ほ)めて頂けるような、神様の御心(みこころ)にかなうような、そういう一日を過ごさしてもらえたらいいなぁと思いますね。

はい、どうぞ今日も一日、信心のお稽古(けいこ)をさせて頂きましょう。よくお

参りでした。

（了）

津田昇平教話　第十五話

令和三年一月十五日　朝の教話

令和四年九月二日　初版発行

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五